

21PO-am434S

調剤薬局で働く薬剤師を対象とした薬剤師のプロフェッショナルリズムに関する質的研究

○男澤 唯¹, 浅井 篤¹, 大北 全俊¹, 田中 雅之¹ (¹東北大院医)

目的:本研究の目的は調剤薬局に勤務する薬剤師を対象に質的調査を行い、薬剤師のプロフェッショナルリズムに関する見解を明確にすることである。方法:実務経験が4年以上の宮城県内の調剤薬局で勤務する薬剤師17名を対象としてフォーカスグループインタビューを行い、質的分析法を用いて分析を行った。結果:モラルジレンマの事例収集では【在宅業務におけるジレンマ】【政策におけるジレンマ】【疑義照会時における関係者間のジレンマ】の3カテゴリーが抽出された。プロフェッショナルとして仕事ができる薬剤師では【薬学的専門知識を持つ】【処理能力が高い】【コミュニケーション能力がある】【社会環境の変化に対応できる】【信頼される】の5カテゴリーが抽出された。薬剤師の共感については参加者全員が【共感が必要】と回答し〈話を聞くこととしての共感が必要〉〈情報収集としての共感が必要〉の2サブカテゴリーが抽出された。AI導入後の薬剤師のプロフェッショナルリズムでは【AI導入による業務充実】【AI導入による危機感と期待感】の2カテゴリーが抽出された。考察:対物中心であった業務が対人中心に変化していることを背景に、社会環境の変化に適応でき、高いコミュニケーション能力があることが薬剤師のプロフェッショナルリズムに特に必要と考えられる。またAIが薬剤師業務に導入された場合にも対人業務は残るため高いコミュニケーション能力、患者から信頼されることは特に重要となるだろう。そのために患者に共感することは必須であるが、今後かかりつけ薬剤師制度や在宅業務が推進され患者との関わりが現在よりも密になる場合に、どのような共感が薬剤師のプロフェッショナルリズムに必要となるのか今後さらに考える必要がある。